

論 文 要 旨

学位論文題目 テレビ視聴が子どもの学力・知的能力に与える影響

氏 名 工藤（近江） 玲

本論文は、テレビ視聴が子どもの学力・知的能力に与える影響について、①先行研究の知見を科学的に統合したうえで、日本における実証的な研究知見を蓄積すること、②テレビ番組の内容と学力・知的能力の種類によって、両者の相関関係や因果関係がどのように異なるかについての議論を深めること、③読書時間や塾・学習に費やす時間との置き換えで説明できるか検証すること、④テレビ視聴に関する母親の意識や態度の実態を明らかにすること、⑤テレビ視聴に対する母親の意識や態度による調整効果を検討すること、以上5点を目的とし、4つの研究を報告するものである。

研究1では、テレビ視聴時間と学力・知的能力との関連を検討した66の研究から得られた508の効果サイズを、相関係数から算出された効果サイズと偏相関係数から算出された効果サイズを区別した上で、データを収集した国や時期、研究デザイン、テレビ番組のジャンル、学力・知的能力の種類といったカテゴリーに分類し統合した。その結果、番組のジャンルによって両者間の相関関係が異なること、テレビ視聴時間は、総合的な学業成績やIQ、読解、数学、社会、科学、創造性・想像力といった幅広い教科の成績や知的能力と有意な負の相関があることなどが確認された。

研究2では、研究3と研究4で使用する映像メディア視聴日誌の基準関連妥当性を検討するために、調査対象児童のテレビ接触量、ビデオ接触量、テレビゲーム接触量ならびにテレビのチャンネル別接触量を、映像メディア視聴日誌と視聴状況測定機器で測定した。両者のデータを比較した結果、映像メディア視聴日誌によって測定されたテレビ接触量の基準関連妥当性が、先行研究と同等以上に高いことが示された。

研究3では、小学5年生を対象に2時点にわたる縦断調査を実施し、1時点目のテレビ接触量ならびに教育番組の接触量が2時点目の知的能力に与える影響を、パス解析によって検討した。その結果、テレビ接触量は空間処理能力に対してポジティブな効果を示した一方で、言語能力に対してネガティブな効果を示した。また、教育番組の接触量は社会的規則の理解に対してポジティブな効果があった。このことから、知的能力には、番組のコンテンツに関わらずテレビ視聴時間の影響を受けるものと、コンテンツによって影響が異なるものがある可能性が指摘された。さらに、教育番組で扱われた主題ごとに知的能力への影響を比較したところ、教育番組の内容によって知的能力への効果が異なる可能性が示唆された。

研究4では、11年にわたる長期縦断データを用い、テレビ接触量、テレビ視聴量（テレビ接触量からテレビがついているだけの時間を除いた時間）、読書時間が国語の学力に与える影響を検討した。まず、8・9歳時点のテレビ接触量、テレビ視聴量、読書時間が2年後の国語の学力に与える影響を構造方程式モデル分析によって検討した。その結果、8・9歳時点のテレビ視聴量が2年後の国語の学力に与え

るネガティブな影響と、同時点の読書時間が2年後の国語の学力に与えるポジティブな影響が検出された。ただし、テレビ視聴が国語の学力に与える影響については、塾・学習に費やす時間との置き換えによって説明される可能性が示唆された。

また、潜在曲線モデル分析を行い、2・3歳時点から8・9歳時点までのテレビ接触量、テレビ視聴量ならびに読書時間の切片と傾きが国語の学力に与える影響を検討した結果、テレビ接触量ならびにテレビ視聴量の傾きは国語の学力にそれぞれネガティブな影響があった。これは、幼児期から就学後にかけてのテレビ接触量ならびにテレビ視聴量の増加率が高いことが、いずれも就学後の国語の学力にネガティブな影響を与えることを示す。一方、読書時間の傾きは国語の学力にポジティブな影響があり、幼児期から就学後にかけての読書時間の増加率が高いことによって国語の学力の伸びが説明されることが示された。

さらに研究4では、SESが高い家庭の母親ほどテレビ依存傾向が低く、テレビ視聴による悪影響を懸念し、子どものテレビ視聴に介入していることが確認された。しかし、テレビ視聴が子どもの学力に与える影響において、こうした母親の態度や意識による調整効果は確認できなかった。

以上4つの研究の結果に基づき、テレビ視聴が子どもの学力・知的能力に与える影響プロセスモデルが提出された。